知り過ぎた木々

幽霊シリーズ
番外篇

知り過ぎた木々

1985年3月20日　第1刷
1985年4月25日　第3刷

著　者　赤川次郎

発行者　西永達夫

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3—23
電話　東京03(265)1211(代)

定　価　680円
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社

©Jiroh Akagawa 1985　Printed in Japan

長篇推理小説

〝幽霊シリーズ〟番外篇

知り過ぎた木々

赤川次郎

文藝春秋

カバー　佐伯俊男

知り過ぎた木々

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

高原の空気は、湿り気を含んで冷たかった。

朝の光が、木々の合間を縫って、白い指を伸ばしている。風は、ほとんどなかった。

梢から梢へ、鳥が鳴き交わしている、その下を、少女たちが走っている。

十四、五人の少女たちは、誰もが同じトレーニングシャツ、それに、白いショートパンツ姿だった。

シャツは、森の中へ紛れてしまいそうなグリーンで、背中には黒々と汗がにじみ出て、広がっている。

年齢は十六、七歳。もちろん、タイプは様々だが、誰もが、きれいなフォームで走っている。

グリーンのシャツの右上に、小さく、番号をふった布が縫いつけてあった。

今、トップを走っている少女は、〈9〉をつけている。
ほとんど一団となって走っている少女たちの中では、少し小柄で細身だが、足の長さ、手の長さのバランスがいい。おそらく、一番息づかいも乱れていなかった。
林の中の道は、時に広がり、時に狭くなる。狭まったとき、列がたてに伸びて、先頭と最後尾の間が離れた。
NO・9の少女は、数メートル先に出ていた。肩より少し長い髪が、一歩ごとに揺れる。地を蹴る足取りは、まだまだ軽やかだった。
——朝の木立ちの静寂を、少女たちの規則正しい息づかいと、足音が、風のように吹き抜けて行く。
道が、次第に細く、また険しくなる。
上り、下りが複雑に入り混り始めた。それにつれて、一人一人の間が開いて行く。
やがて、道は、連続的な上りにかかった。
NO・9の少女は、ほとんど変らないペースで、上りの道を辿って行く。その後、二番手につけているのは、少女たちの中でも、大柄で、がっしりした体つきの少女だった。
髪を短く切って、きつく、ヘアバンドでとめている。シャツにつけた数字は、〈3〉だった。
先頭のNO・9の少女からは、十メートルほど遅れていた。それ以外の少女たちは、ずっと

離されて、また少しつながっている。

上りの道は、ずっと続いた。

NO・9の少女も、息が激しくなっている。顔は真赤になって、汗が額から首筋へと流れていた。グリーンのシャツは、もう、初めの色が分らないほど、汗で濡れている。

それでも、NO・9の少女のペースは、ほとんど落ちなかった。

だが、二番手の、NO・3の少女の方はぐっとペースが落ちていた。体が大きいだけに、上りは苦手らしい。

苦しげに喘ぎながら、頭を振って走っている。汗は滝のように首筋を流れ落ちた。

先頭の少女との間が、見る見る離れて行った。NO・3の少女は、それでも、気を取り直したように、また少しペースを早めた。

でも、それも長くは続かない。足が上らなかったのか、石につまずいて、転んだ。

アッ、と短い声が上った。左の膝をすりむいて、少し血がにじんでいる。——NO・3の少女は、座り込んだまま、動けなかった。

激しく肩で息をして、頭を垂れている。顎の先から、汗が滴り落ちた。

もう、立ち上るだけの気力もないようだった。やけ気味に、ヘアバンドをむしり取って、手の中で握りしめた。

そのとき、傍の茂みがザザッと揺れて、誰かが姿を現わした。NO・3の少女は、びっくりしたように目を見開いた。

その人影は、少女の前に来て足を止めた。——少女は、一旦、目を伏せたが、やがてそろそろと顔を上げ、その人物の視線を受け止めた……。

「——記録は期待できないな」

と、河原が時計を見て言った。

白い開襟シャツから、陽に焼けた、細い首が突き出ている。頬のこけた、骨ばった顔、額のはげ上った、厳しい面立ち。

髪はほとんど白くなっている。

「平地のようには行きませんよ」

と言ったのは、河原の隣で、腕組みをしている、太った男だ。

四十代の、色の浅黒い肥満タイプ。——落ちついているように見せかけているが、スポーツシューズの爪先が、苛々と地面をけっていた。

「精神力が、体力を補うのですよ。それでこそ、人間なのです」

と、河原が言った。

「はあ、それはもちろん……」
と、腕組みを解いて、神田(かんだ)は、曖昧(あいまい)に言った。
双眼鏡に目を当てていた佐倉純子は、二人のやり取りに、ふと笑みを浮かべた。
人間というのは、ドラマのように思いもよらないセリフを口にはしないものだ。河原も神田も、同じようなやり取りを、何度もこれまでにくり返していた。
河原は学園の理事である。教師ではないが、本職以上に教師らしく見える。
次期学長として、河原の名が関係者の間で公然と口にされていた。
体育科の主任教師、神田が面白くない気持も、当然といえば当然だろう。
教師でもないくせに、と思えば、ムッとするが、次の学長、と思えば逆らうわけにもいかない。
そして、もちろん、河原に、いい所を見せたいという気持もあって、早く先頭の走者が見えないか、と苛々しているのである。
「佐倉先生」
と、河原に声をかけられて、純子は、
「は、はい」
と、あわてて双眼鏡を持ち直した。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「まだ見えませんか」
「そうですね。まだみたいです」
と佐倉純子は答えた。
「最近の子は、軟弱になって困る」
と、河原が眉を寄せて首を振った。「問題は精神力です。少々の体力不足など、精神力で補える」
純子は河原の――というより、河原は堂上学長の言い方を、そっくり真似ているだけなのだが――言葉には、とてもついて行けないので、一心に双眼鏡を覗いているふりをした。
「私の息子が学生だった頃は、何日も粗末な食事だけで、一日何十キロも走り抜いたものです」
純子は、また始まった、と思った。その、当の「息子」が、今は学園の事務長で、見る影もなく不健康な巨体を揺すって歩いているのを知っていれば、この美談の値打も下ろうというものである。
――実際には、まだそうタイムが悪くなっているわけではない。
ただ、河原は、いつも何か文句を言っていなくては気の済まない男だった。
「途中の坂はとてもきついですから」

と、純子は言った。
「道には坂があるものです」
河原は、悟り切ったような口調で言った。「人生と同じです」
純子は、笑い出しそうになるのを、必死でこらえていたが……、
「あ――見えました」
と、言った。「一人ですけど。――下って来ますわ」
「誰ですか」
と、神田が前へ出る。
「ちょっと顔までは……。ああ、きっと長谷井さんだわ」
「やっぱり長谷井か」
と、神田が肯いた。「一番安定した力を持ってますからね、あの子は」
「そう、やっぱり長谷井さんですわ」
と、純子はくり返した。
「独走だな」
と、神田は言った。
「そのようです」

「みんなが一丸となってゴールへ入るのが、理想ですがね」
と、河原は文句をつけた。
一番手の生徒が見えてホッとしたのか、神田も多少気が楽になった様子で、
「オリンピックだって、そうは行きませんからね」
と言い返した。
道は、下りから、あとは平地をくねくねと曲って、純子たちの立っている、林の外れまでやって来る。
長谷井美知は、もう下りを降り切って、平地にかかっていた。双眼鏡なしでも、走って来る姿が、木立ちの間に見え隠れするのが見分けられた。
「ペースがそう落ちていない。さすがだ」
と、神田が肯きながら言った。
「あの子は努力家ですもの」
と、純子は言った。「コツコツと、勉強もよくやるし——あら」
「どうしました？」
と、神田が純子を見る。
「次の子が見えたようです」

純子は双眼鏡を目に当てた。
「誰です？」
「さあ……。ちょっと分りません。でも――」
「どうかしたんですか」
「凄い早さだわ！」
純子の声は、つい大きくなっていた。
その生徒が誰なのか、純子にはよく分らなかった。下り坂で、足下を見ながら走っているから、顔が伏せがちになって、よく見えないせいもある。
しかし、実際、双眼鏡で捉えるのが、困難なほどの勢いで、その生徒は走っていたのである。
「――凄い！」
神田が言った。
二番手の少女は、もう平地へ達していた。
「あれは――」
「折原だ！　折原ですよ。驚いたな！　凄いパワーだ」
「折原さん？」

純子は、もう一度、双眼鏡を目に当てた。木々の合間を、駆け抜けて来る少女――。
折原待子だ。
どうして、こんなに近くへ来るまで分らなかったのかしら……と、純子は思った。
「抜くぞ！」
と、神田が言った。
折原待子は、前を行く長谷井美知へ、ぐんぐん迫っていた。
「これは凄い」
めったなことでは、びっくりした顔を見せない河原が、目を丸くした。
長谷井美知は、やっと、後ろに迫って来た折原待子に気付いて、振り向いた。
あわててペースを上げる。しかし、勢いをつけて追い上げて来た折原待子は、そのまま一気にトップへ出た。
「やった！」
と、神田が言った。
いつの間にか、ギュッと、手を握りしめている。
純子たちのいる場所まであと二十メートルというところだった。長谷井美知も必死で追ったが、再び逆転するには、もう距離がなさすぎた。

ゴールに入ったのは、折原待子だった。
そして、五メートルほど遅れて、長谷井美知。
ワーッと、声が上った。
純子や神田の後ろに、数百人の生徒たちが集まって、ゴールインを待っていたのである。
最後の逆転劇に、応援の声を忘れていたらしい。そして、長谷井美知までがゴールに入って、やっと解き放たれたように歓声を上げたのだった。
「よし、よくやったぞ！」
神田が、折原待子へと駆け寄って、何度も肩を叩いた。
「おめでとう！　凄い精神力だった」
河原もご機嫌の様子で、折原待子の手を握っている。
折原待子の方は、激しく息をつきながら、顔を伏せがちにして、
「ありがとうございます」
と、答えた。「――お腹が痛くて。――少し横になりたいんですが」
「分った。休みなさい。表彰式まで、二十分はかかる」
河原は肯いて、折原待子の背中を軽く叩いた。「神田先生、この子について行って、みてあげて下さい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com